
ポケモンハンターズ

水晶の炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンハンターズ

【NZコード】

N6796J

【作者名】

水晶の炎

【あらすじ】

ポケモンがすっごく大好き…ではないけど、高校生の黒鉄輝は相棒のデルビルと共に現実世界に出てきたポケモンを回収することになつた。一緒に住んでる従姉妹の赤坂千影、同じクラスの白銀美鶴、まあ他にも何人かと共にロケット団に立ち向かう! こうござん期待!

第1話・俺の日常

朝。

「うわやあああああ……！」

目が覚めた俺、黒鉄輝クロガネアキラは大声をあげた。
理由は夢の内容。

いい夢だったのに、途中から悪夢に変わっていた。
具体的に言うと、好きな人にキスする瞬間…相手が男に…おぞましくて寒気が…それに鳥肌が…！

バタンツッ！タツタツガチャツ！

「ど、どうしたの…？」

俺を心配してか、慌ただしそうに女の子が部屋に入ってきた。

彼女の名前は赤坂千影アカザカチカゲ、俺の従姉妹である。

従姉妹なのに一緒に住んでる理由…それは、彼女が俺の通っている高校に合格したからである。

近場を選べばいいものを…何でわざわざ埼玉から大阪に来るかねえ。

「何でもねえよ…。それと、少しは恥じらい持てよな…（照）

「ふえ…？きやつ…？」

俺は赤みがかつてゐる顔を隠すように伏せ、千影は慌てて部屋に帰つていった。

着替え中だつたのか、下着とブラウスといつ思春期の男子なら喜びそうな格好だつた。

俺は紳士だからそんなことはしない、断じて。さて、俺も着替えるとするか…。

季節は夏。

夏休みまで1ヶ月ちょい。

そして時刻は6時半。

着替えやらなにやら終わつたから、カバンとラケットをもつて階段を降り、リビングへ。

母親が朝飯を作つており、千影がその手伝いをしてゐる。

俺はリビングにある椅子に座り、リモコンでテレビのスイッチをつけた。

朝からやつてゐるものと言えば…まあ、大抵はニュースだよな…。気になるニュースを見つけた。

謎のテロリスト集団によつて埼玉のとある中学を占拠…世の中物騒になつたもんだ。

ニュースで大々的にやつてゐることは、新聞にも載つてゐるかな?しかし今は親父が会社に持つていつてしまつたため読めない…。何故持つていく必要がある…。

まあいい…暇だから俺の話でもしてやる。

名前はさつき言つたな、歳は17、高校2年。

成績優秀頭脳明晰…とまではいかないが成績は上の中、自分でいうのもなんだけど頭はいい方だとおもう。

部活は軟式テニスだな。

次は千影についてだ。

歳は16、高校2年、2年連続同じクラスだったりする。だから、宿題出たら[写し放題]…というわけでもない。

バカだからなあ…とか言つたら怒られるから黙つておひつ。

成績は下の上、でも可愛いし、性格もいい。

女子テニス部の部長で次期エース（3年が引退してないから次期）。先輩後輩男女構わず人気者っていう、俺と大違いだ。まあ、こんなもんだな。

「「」飯出来たよ~」

説明が終えたところで千影から朝飯ができたとの声が。5分で飯をたいらげ、学校へ行く準備をする。

「待つてよ~。速すぎるつてば~」

「今日はテニスの朝練があるんだよ。遅れると副部長にじびやかれるんだよ…。」

「あはは…みーちゃん怖いもんね（苦笑）」

「そういえば、さつき一コースで埼玉の中學がテロリストに占拠されたつてやつてたけど、世の中物騒になつたもんだな」

「ああ、あれ…ね」

千影の表情が暗くなり、手が止まる。
なんかあつたのか？

「輝、やめな。千影ちゃん、ごめんな。ウチの息子つてば無神経で
「いえ、別に輝君が悪い訳じゃないんです。占拠されたのが私の母
校つてだけで…」

「え…それ、まじか…」

気付かなかつた…。

うつわ、俺、マジで無神経。

「あー、うふ。ごめんな、千影」

「だから、輝君は悪くないですって。いけそつさま
それでも千影の顔は曇つたままだ…。
さすがに氣を使わないと。

「…千影。今日は一緒に学校行つてやるよ

「え…ありがとう（笑）」

俺は支度を終え、玄関で千影を待つた。
数分後に千影は出てきた。

女の子の準備は時間がかかるようだ。

「そういえば輝君と一緒に学校に行くのって、久しぶりだなあ」

一人で学校に行くのはかなり珍しい。

俺は軟式テニスの平部員、それに対しても千影は女子硬式テニスの次
期エース。

気を使ったのもあるけど、一緒に行けるのは朝練の時間が被つたん
だ。

まあ、それだけじゃないんだけどな。

「そうだなあ、1年のとき以来だもんな

「うふ…」

沈黙が続く。

何をしゃべつていいのかわからんねえ。

なんか話題話題…。

「そりいえば、朝の大声。あれ、何だったの？」

沈黙に耐えられずなのか、千影の方から声をかけてきた。
ちょっと助かる。

「ああ…ちょっと悪夢を見てな。思い出しただけでも鳥肌が…」

「あははっ。それは残念だつたね。私はいい夢だつたよ」

「どんな？」

「ポケモンつて知ってるよね？ポケモントレーナーになつて旅する
夢…また見れたらいいのになあ」

「へえ…意外だな、千影の口からポケモンつて出るなんて。
今この歳でそんなこと言つたら、周りから笑われるのに…。
ふと気づいたら校門が見えていた。

「…あ、もうついたまつたな」

「そりだね」

歩いて20分…近いって嬉しいけど、いつも時はもう少し遠けれ
ばって思うな、やっぱ。

校門を通り抜け、テニスコートまで無言で歩き続ける。

そこで、事件は起きた。

「千影！何でそんな男と登校してんのさー早く離れない」と馬鹿菌が
移るよ！」

「黒鉄！千影に近づくな！」

「そりだと魔女のところに行きな。一度と女テニ、ウチのエース

に近づくな！

女子の集団が颯爽と現れては適当に罵倒していき千影を攫つていつた。

そう、これが一緒に登校できない理由。
女テニの連中にはなぜか嫌われるんだよなあ……まあ、だからどうしたって話だけど。

つか、俺は馬鹿じやねえよ。

てめえらの方が馬鹿だろ？が、どブス！

あとウチの副部長のことを悪く言うんじやねえ。

……でも本人たちの目の前で言えない俺は、腰抜けだなあ……。

しばらくして部室前に到着。

そこに……こっちを睨みつけてる男が一人。

「やつと来やがつたな、黒鉄え」

「てめえらのせいで新入部員減つたの、忘れてねえだろ？な！」

男子テニス部の奴らか……次から次へと、疲れるからやめてほしいよ。

「その辺にしどきなよ

「あつ！白銀さん！」

奴の名は白銀美鶴シロガネミツル、男テニの部長でクラスメートだ。

美鶴「別に新入部員が減つたのは、ソフトテニス部のせいじゃない。僕たちの努力が足りなかつただけだ。いつまでもソフトのせいにする部員は弱いままだよ。わかつたらせつと練習に戻るんだ」

「す、すみません！部長！」

部員たちは自分たちの部室に戻つていった。

正直、助かつた。

女子には無視されるけど、男子には暴力が待つて いるからなあ。

輝「サンキュー、美鶴。助かつたよ」

美鶴「いやいや、礼を言われる筋合はないよ。クラスメートだろ？」

輝「まあな。てか何で俺ばつか…」

美鶴「彼女には手を出せないし、彼は強いからね。当然だろ」

輝「確かに（笑）」

美鶴「じゃあ、後でな」

俺は美鶴と別れて部室に向かつた。

「遅い！」

「げっ！」

副部長の奴、もう来てやがる。

まあ当然のことだけど、部長も来ている。

副部長、瑠璃^{ルリミズキ}水城、女、クラスは違うけどダメ。

部長、翡翠蓮希^{ヒスイハスキー}、因みに男、クラスは同じ。

3年がないのはこの部を作ったのが、俺らが1年のときに水城が先生に頼み込んだから。

まあOKしてくれたけど条件があつて、女テニと男テニに試合で勝つことと、部員が5人以上であることだつた。

部員はすぐに集まつた。

問題は試合の方。

俺は中学のときにソフトテニス部だつたから何とかやれたもの…

水城は未経験だつたために不安が渦巻いていた。

蓮希は男子テニス部から引き抜いた（というより、自分から入ってきた）から何も問題は無かつた。

結果、男テニ相手は蓮希でストレート勝ちだった。

女テニの場合、水城がやると言つたからやらせてみた…だが、予想外に水城は強く蓮希同様ストレート勝ちだった。

こうして、我がソフトテニス部は出来たのだった。でもそのおかげで…水城は魔女と呼ばれ、蓮希は裏切り者と言われるようになつた。

水城「何独り言言つてんのよ」

輝「いやあ、読者の皆様に説明をと」

水城「はあ？ わけわかなないこと言つてないで…ランニングよ。 1年はもう行つたわ。 あとは2年だけ。 2年は第3コースよ」

「なぬ！？ 第3コースだと！？」

「1時間目に間に合わねーよ」

水城「灰谷、山吹…あたしに逆らうの…？」

「行つて来まーす」

輝「押し弱つ」

水城「あんたも行けつ。 ただでさえ方向音痴なのに…ビリは罰ゲームよ」

輝「行つて来まーす」

つか第3コースかよ…。

学校の南西にある山道を一周じやねえか…。
どう考へても授業は遅刻だな、うん。

学校から出て10分後：山道に入つた。

因みに第1コースは校内一周、第2コースは東にある河川敷を走る、
第3コースが今走つている山道を一周、さらに第4コースがあり、
それは地獄の道と呼ばれている。

ま、とりあえず山道…もとい獣道を走るか。

…走つていて気づいたことがある。

山道を登りながら数十分…完全に迷つた！

威張つて言えることじやなこなび。
さて、これかじりづすれ……！？

下を見ずに走るべからず……俺は今いつ思ったね。

地面が無い……。

俺はそのまま急降下し、気を失った……。

第2話・非日常の始まり

イテテ…ん? 何故か頬が暖かい…。

ペロペロ

舐められてる? 何に?

俺は目を開け、体を起こした。

すると、小さな黒い子犬が俺の膝の上に乗つかっていた。崖から落ちたのにあんま怪我してねえな。

…とりあえず進むか、にしてもどうやって帰れば…。

「ガウツ」

輝「何だ? おまえ、道わかるのか?」

「ガウ!」

子犬は走つていった。

放つて行かれると困るから、急いでついて行つた。
だがどんどん深く潜つているような気がする。

でも、自分でいくよりますか…あれ?

さつきまで前を走つていた犬が、忽然と姿を消した。

俺は少し心配になり探した…まだ子犬だしな。

探し始めて数分…見つからない。
先に行つちゃったのかな…。

あー疲れた……とりあえず座るか。

力チツ

ん?

突然足元に大きな穴が開き、俺は空中に浮かんでいた。
まあ、ものの数秒間だが……。

輝「また落ちるのかあああ……」

俺は落ち……痛つ！

意外と浅かつたためダメージは少なくてすんだ。
だが……ここはどこだ？

山の地下にこんな機械的なところが在るはずがない。
まあ実際に在るのを見てるんだけど。

「やつたわい、デルビル回収じや……！」

「やりましたね、博士！」

……誰？

遠くの方で騒がしい声が聞こえると思つたら……。

輝「おレジジイ。小動物イジメて何が楽しいんだ？」

「き、君は誰じゃ？」

輝「誰じゃ……じゃねえよ。よくも人を落としやがって……それにその子犬嫌がつてんじゃねえか。離してやれよ

「子犬？こいつはポケモンじゃ」

輝「んなもんゲームの存在だらうが……頭逝つてんのか？」

「私が説明しますね。私は大木戸オオキドナミ七海ヨシナリ、そこにいる大木戸オオキドコキナリ幸也ヨウヤの孫です」

輝「俺は黒鉄輝。七海さんはゲームに出てくるナナミと関係あるんですか？」

七海「関係はないですよ。では、本題に入りますね。私たちはポケモンをリアルでできるように、装置を開発しました。実験は成功、しかし装置が暴走してしまい、ハートゴールド／ソウルシルバーまでに出てくるポケモンたちがゲームの世界から飛び出してしまったの。そこで、私たちはポケモンを回収しているのだけど……やつとの思いで捕まえたのは今の『デルビル』だけ」

輝「…その回収作業、俺に手伝わせてくださいー！」

七海「え…でも…」

輝「危険…とでも言いたいんですか？別に危険でも構いません。それに楽しそうですしね（笑）」

七海「…そうね。では黒鉄輝君。回収を手伝ってくださいー…それではコレを…」

七海さんはモンスター・ボール…の様なものを取り出した。
モンスター・ボールに似ているけど、上の部分に数字が入ってる。

七海「これはマスター・ボールの上をいく、名付けてゴッドボール。コレを開発したのはお爺ちゃんとゲームのオーキド博士。使い方はまだ未知なの」

輝「そうですか…。じゃあまずはデルビルの回収ですね。デルビル！」

デルビルは幸也さんに囁みついで、手を振りほどき俺の元に近づいた。

輝「デルビル、回収！」

カチッ

「デルビルはボールの中に吸い込まれた。

輝「N.O.228 デルビル回収完了…ん? 何だ…このスイッチ」

ボールの真下に小さなスイッチがあった。

それを押してみるとボールが光り輝き、目を閉じてしまった。目を開けると、ゴッドボールの色が輝きのない銀色に変わっていて…何よりも一番吃驚したのは…。

輝「ガウガウ! (何で俺がデルビルになつてんだよ….)」

七海「…輝君が…デルビルに」

幸也「お、成功かのう。ボールに変身機能を付けておいたのじゃ。上の数字に回収したポケモンの番号を入力し、下のボタンを押すとそのポケモンに変身できる機能じや。変身するとポケモンとも会話できるようになるんじや。因みにもう一度同じボタンを押すと元に戻るぞ」

俺はすぐさま元に戻り、まず…ジジイを殴つておいた。
そして、デルビルをボールから出した。

輝「コイツは俺の最初のポケモン。そして相棒だ。つーことで、常に外に出しどくんで…」

氣絶しているジジイと呆然している七海さんを放つておいて、壁に掛かっている時計を見た。

10時ジャスト…俺、崖から落ちてどんだけ寝てたん?
じゃないくて…

輝「学校、遅刻じゃん！？じゃ、これで……」

俺は正式な出口から出ると、ダッシュで学校に向かった。
「ん？」

変身できるってことは、四足歩行が可能ってことか…。
いつちよやりますか…変身！

俺はデルビルになり、より速く走れるようになつた。
すぐに学校に着き、閉まっている校門を飛び越えて部屋へと向かつた。

部室で変身を解き、制服に着替えてさつやと校舎に侵入し、教室に向かつた。

だが、担任に廊下で見つかり説教をくらつた後、やつと教室にたどり着いた。

たどり着いたのもつかの間、教師にさりに説教を受けて、ヘロヘロの状態で自分の席に着いた。

机に突っ伏していると、いつのまにか机にメモが置かれていた。
メモはざら千影からのようだ。

ナニナニ…『遅刻したけど…どうしたの？』…フム、妥当な質問だ。
俺は一番後ろの廊下側の席に座っていて、千影は真反対の窓際の席に座っている。

さて、どうやって返事を変えそつか…。

美鶴「おい、輝。どうしたんだ？」

輝「ん…ちょっと赤坂に手紙を回したくてな」

美鶴「珍しいな、輝が赤坂に手紙なんてぞ」

輝「ん…そうだな」

実は、俺と千影が一緒に住んでるってことは学校の奴らには言つてない。

だって…バレたら地獄絵図じゃん…。

因みに美鶴の席は俺の隣。

でも、そこから千影の席までは全員女（どんな席順だよ）で、俺を嫌い千影を慕つている。

あれこれ悩んでいると、これまたいつのまにか返事の手紙は消えている…。

…考えるのはよそう、疲れるだけだ。

因みに返事は『山で迷子。情けねえ話だ。心配かけてごめんな』だ。

ま、紙が無い今、返事が届いたか不明だがな。

授業は終わり、昼休み…。

俺は飯を食つてテニスコートに向かつた。

この時間は人もこないし…。

輝「出て来い！デルビル！」

ポンッ

デルビル「ガウッ！」

輝「そんでつ、変身！」

俺はデルビルになつた。

昼休みを使ってデルビルと会話しようかと思つてな。では、ここからポケモン語。

輝「よう。元氣か？」

デルビル「…」

輝「…もしかして通じてない？おつかしいな…」

デルビル「通じてるよ」

輝「そか、そらよかつた。名前は？」

デルビル「んなもんねえよ、てめえがつけろや

輝「うわっ、口悪つ！しゃあないな…じゃあ、オマエは今日からエンキや」

デルビル「エンキ？」

輝「おう。地獄の閻魔大王の『閻』と炎タイプの意味の『炎』をかけて、さらには『鬼』の強い力を持つことでエンキや」
デルビル「ふうん。結構いい名じやねえか。気に入った。ありがたく受け取つとく」

輝「ほな、よろしくな。エンキ！」

エンキ「ふん」

輝「素直じやねえなあ」

エンキ「つるせえ…ん？おい、輝。何かいるぜ？」

輝「確かに…何かいる。出てこいやー！」

ガサガサ…

出てきたのは…

「ん～？確かにここに輝がいたはずやけど…」

「氣のせいだつて。屋上から見ただけなんやし」

あいつらは…同じ部活の灰谷と山吹…なんのようやねん。
ちゅーか、俺、ポケモンになると大阪弁になんねんな…つてありえ
んわ！

因みに先にしゃべったんが灰谷や。

輝「よう。灰谷、山吹、俺になんかようか？」

エンキ「…無駄だぜ？」

輝「なんでや！」

エンキ「あこづらの顔みてみる」

輝「あ？」

「」から完全日本語。

因みに俺らの今の会話を日本語で…。

輝「ガウ。ガウ？」

エンキ「…ガウ」

輝「ガウガウ！」

エンキ「ガウガウ」

輝「ガ？」

と、いうな。

モチロン灰谷、山吹の反応は…

灰谷「なんだ？」の犬つ「」

山吹「やべえよ、水城のやつにばれたら…早く逃げ出さうー。」

となる。

輝「ガウガウ！（んだとお、こんなにやうお。かみついてやうつか…）

「

エンキ「…ガウ（…やめとけって。んな」としても解決しねえだろ
うが）」

輝「ガウ（しゃあない。いくで、エンキ）」

俺とエンキはテニスコートから走り去った。

そして、校舎の裏に行き、元に戻りエンキをボールに戻して教室に

房
大

教室に戻ったら美鶴が声をかけてきた。

美鶴「お、輝。灰谷が探してたぞ?」

輝くん わかっても なんのよ！た？

軍「確」二

俺は窓の外を見た。

卷之三

美鶴「どうした？」

輝一あ……なんでも、あ！俺たよーとエトレーヌ

俺はトイレといいつつ外に飛び出し、エンキをだした。

糸井重里「アーティスト」

輝「」

エンキ「ガウ（いつたい何を見たんだ）」

飛行場の示範演習は多分、かたがたと思ふ

輝「オードリル！！！」

第2話・非日常の始まり（後書き）

回収したポケモン

No.228 デルビル

第3話・見つかった！？

昼休みが終わり、授業が始まる直前。

窓の外でポケモンが飛んでいるのを発見。
俺は回収に行こうと授業サボるのを覚悟で、外に飛び出した。
しかし、そのポケモンとは…なんとオーデリルであった。
だが、俺と相棒のデルビル、エンキはそれに立ち向かう！
とまあ、あらすじはここまでにしといて…

輝「ぐう…と、とにかく攻撃だ！エンキ、【火炎放射】だ！」

エンキ「…ガウ！（んなの覚えてねえよ！考えて言えや！）」

輝「あ、そつか。じゃあ、【煙幕】だ！」

エンキ「ガウ（了解！）」

煙幕がオーデリルを包み込んでゆく。

が、羽根を羽ばたかせ煙幕を吹き飛ばしてしまった。
そしてオーデリルが突っ込んでくる…

エンキ「ガウガア！！（早く指示をだしやがれ！）」

輝「まてって…確か…ダメもとで、【炎の渦】だ！」

エンキ「…ガ！？（んなもん覚えどるか！）」

輝「やればできるーいいからやつてみろつてー来るぞー。」

オーデリルは俺に突っ込んできた。

俺は咄嗟によけ、デルビルはオーデリルに突っ込む。

そして、炎をはいた。

炎はオーデリルを包み込んだ。

逃げ場を失つたオーデリルは空から落ちてきた。

エンキ「ガウッ！（今のうちにだ！）」

輝「いけえ、ゴッドボール！」

パシング

ゴッドボールはオーデリルの頭部に当たつた。
オーデリルはボールに吸い込まれた。

カタカタカタ……カチ。

輝「いよっしゃあ！オーデリル、回収完了！」

エンキ「ガウ…（でも何で炎の渦が…）」

輝「いやあ…ゲームと同じなら遺伝技があると思つてな」

エンキ「ガウ？（遺伝技？）」

輝「いや、気にするな。戻すぞ」

エンキ「ガウ（了解）」

俺はエンキを戻して教室に戻つた。

しかし、これを見ていたものがいたのであつた…。

美鶴「なななななんだ！？」

？「ふむ。おそらく、アレはポケモンかと思われるよ」

美鶴「なんと！サボつた理由はあれか…」

？「しかし、ポケモンなんぞこの世にあるわけがない」

美鶴「見ちゃつたもんはしょうがないって。部活の時にでも後を付けてみるか…」

？「いんじやね？俺も赤坂に頼んでみる」

美鶴「じゃあ、決行は放課後だな

放課後：

輝は教室を飛び出して、真っ先にテニスコートへと向かった。

美鶴「早いな」

蓮希「僕も急がないと…」

美鶴は不思議に思った。

それで、急いでいる灰谷に聞いてみた。

美鶴「何かあつたのか？」

灰谷「部活だよ、ぶ・か・つ。オマエのところは気楽でいいよな！」

… そうか、部活か。

あの瑠璃なら厳しくて当然かもな……あ、やつべ、俺も行かないと。

? 「おい、赤坂いるかー？」

美鶴「ん？ 赤坂ならまだいるぜ。おーい、赤坂あ！」

美鶴は千影を呼んだ。

千影は返事をして、俺たちの方に向かってくる。

千影「どうしたの？ 賴斗君

頬斗「ちょっと今日の部活休んでいいかなあ？」

千影「体調悪いの？」

頬斗「いや、そういうわけでもなく…」

千影「じゃあ、ダメだよ。ほら、行くよ」

赤坂は頬斗を引きずつていった。

あわれなり…。

…って俺も行かないと…ってこの台詞一度田じやん。

俺、黒鉄輝は早く来過ぎたせいか、誰もいないテニスコート。
そこで、Hンキを出した。

エンキ「…（なんか用か？）」

輝「一緒にラシニング行こうや」

エンキ「…フウ（何で俺がそんなことを…）」

輝「いいから行こうや。ボールの中におつてもつまらんやろ？」

エンキ「…ガウガウ。ガウガー？（…わかつたわかつた。行くよ、
行けばいいんだろ？）」

輝「オッケ。それじゃ、行くか。今日の『ースは…』第3『ースよ
そうそう、第3』…つて」

後ろを見ると…いつのまにか水城、他にも蓮希、灰谷、山吹がいた。

水城「何を犬としやべつてんのよ」

灰谷「こいつ、昼間にいた犬つこんじゃん」

山吹「まだいたのか。早く追い出そう」

水城「そうね。糞でもされたらたまんない。ほら、あつちいけ。それに、できれば女テニの方に……」

蓮希「それはやりすぎだよ」

水城「ごめん」めん…あ、そういうええば」

輝「なんだよ。まだ何かあるのか？」

水城「アンタ、第5コースね」

輝「……は？」

灰谷「第5コース？」

山吹「そんなのあつたか？」

蓮希「……今作つたんだろう？」

水城「さすが我が幼馴染。わかってるね～」

輝「でも、何でそんなことを……」

水城「アンタ、今日ビリだつたから罰ゲームよ」

輝「……あ…ま、いーや（ポケモンに遭遇するかもしれないし…）。じや、早速行つてくる。エンキ、行くぞ…………あ」

水城「ほお……アンタの犬なの…。もしも糞してたら…顔面にぶつっけてやるわよ…」

輝「ははは…。エンキ、行くか…」

エンキ「…（バーカ）」

輝「で、第5コースつてどこ走るんだ？」

水城「1から3全部」

輝「…日が暮れないうちにに行くか…」

俺とエンキはまず学校を一周した。
でも、ポケモンはいなかつた。

輝「…さすがに、ポケモンは、そつそつ、いない、か」

エンキ「ガウガウ（もう息切れか、バーカ）」

輝「うつせえ…………！？」

エンキ「ガ? (どうした?)」

輝「なんか寒気が…次は河川敷か…水ポケモンに会いそうだな。行くか」

その頃…白銀美鶴は…。

部長として部員に指示を出し、用事だと言つて輝の後をつけていた。

でも、学校から出て行くのをみて、急いで女テニの方へ向かつた。

女テニ…四方八方女子だけ…その中に1人の男子生徒を発見。

それは…女子テニス部敏腕マネージャーの黄金^{コガネライ}頼斗。

今は、赤坂に土下座している。

なぜに…カツコワル…。

頼斗「お願いだ…どうしても、今日だけ!」

千影「うん…。何でそんなに休みたいの?」

頼斗「う…それは…」

千影「じゃあ、だめ」

あいつ、赤坂に弱いのか…。

仕方がない、助け舟を出してやるか。

美鶴「おい、赤坂。今度ウチと試合しないか?」

千影「あ、白銀君…」

頼斗「美鶴…(この鬼婆を説得しに来てくれたのか)」

美鶴「な、ウチの部員が最近だらしなくなつてさ。女テニと試合だつ

て聞いたら、きっとやる気が出ると思うだ。どうだろ？

千影「うーん…でも、もうすぐ試合だから…」

美鶴「じゃあ、なおさらだ。いつも同じ相手だと少し物足りないからさ」

千影「…わかった。じゃあ、次の日曜日にね」

美鶴「よし！それで…もう一つお願いがあるんだが」

千影「なあに？…つて、あれ？いない…ん、地面に紙が…」

紙には『頼斗借ります』と、書いてあった。

千影「…ま、いつか。みんな、ランニングに行くよ～」

頼斗と美鶴は急いで河川敷へと向かった。
輝はもう先に行ってしまったからである

頼斗「助かったよ、美鶴」

美鶴「急げよ。輝はもういつしまつたぞ」

頼斗「真実を掴むぞ！」

美鶴「おう」

その頃の輝…

河川敷で昼寝していた。
だつてだりいじゃん。

ここが終わってもまだ山に行かなくちゃいけないんだぜ？
たりいつたらありやしねえよ。

エンキ「ガウ！（暗くなつちまつぞー！）」

輝「いいんだよ、別に。あ、でも…千影に迷惑がかかるのは困るな
…。ていうか、エンキの話がわかるのはいいけど…」

水晶の炎「うんうん。いちいち括弧つけるのだるいしな」

エンキ「…幻聴が…お、括弧が変わってる」

水晶の炎「コレで楽になつた。また会おうー。」

輝「あー？ 神の声だつたりしてなwww」

エンキ「んなもんいねえよ。お、誰か来たぜ？」

輝「ん…水城だつたりしてなあ。ハツハツハ」

美鶴「輝…犬に向かつて独り言言つてると、変に思われるぞ？」

輝「うえつ！？ 美鶴！」

頼斗「ていうか、それ、本当に犬なのか？」

輝「頼斗まで…。い、犬に決まってるだろ。てか、おまえら、部活
はどうしたんだよ！」

美鶴「サボリ」

頼斗「俺はマネージャーだ。決してサボりではない」

輝「かわんねえよ」

こんなコントを続けていたら、急に雨が降ってきた。
俺たちは急いで鉄橋の下に雨宿りに行つた。

輝「…エンキ、大丈夫か？」

エンキ「所詮雨。別に平氣だ」

美鶴「急に降るとはな。天氣予報では今日は降らないって言つてたけどなあ」

ギャオー

変な鳴き声が聞こえた。

輝「…エンキ、なにかいつたか？」

エンキ「いや、なにも？」

美鶴「…（――）」

美鶴がすごい顔をしていた。

美鶴の向いている方を見ると…ゲッ。

頬斗「…あれって、怪獣…だよな…」

輝「怪獣…青くて、長くて、口が大きくて、目が厳つい。もしかして…ギャラドス？」

美鶴「ポケモンなんてこの世に…いない…って」

ギャオー！！！

第3話・見つかった！？（後書き）

回収ポケモン

N o . 0 2 2 オニードリル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6796j/>

ポケモンハンターズ

2011年10月30日12時18分発行